

教え子を再び戦場に送るな！

8月6日と9日に、戦後67回目となる平和祈念式典が行われました。被爆者も、戦争を経験した方も高齢化が進み、生の体験を聞く機会はどんどん少なくなっています。先日7月21日（土）に、第14回連合千葉平和集会在千葉県労働者福祉センターで開催されました。その講師として広島県原爆被害者団体協議会理事長の坪井直氏が招かれました。そのお話がとても印象的でしたので、ご紹介します。

1945年8月6日8時15分

食堂に食事に来ていた後輩の誘いを断り、大学生（20歳）の坪井氏は学校に向かっている途中、広島県富士見町（爆心地より約1kmの路上）で原子爆弾に吹き飛ばされる。視界一面、銀白色・・・全く音のない世界が1～2分続いた。

爆心地から500m圏内では100%、1km圏内では60%の人が亡くなった。（食堂の後輩は全員亡くなった）

坪井さんは全身焼けただれ、腕や足の肉も吹き飛ばされた状態で逃げた・・・。（この時、運よく爆心と反対方向に逃げたので助かったという）途中、燃え盛る炎の中で家の下敷きになり助けを求める人を、助けられなかったというくやしさが今も残る。焼けただれた手、全身から吹き出す血・・・気力だけで動いているような瀕死の体では家の柱を持ち上げることは不可能だった。お腹に爆風で飛んできた木材が刺さった母親。地獄絵図のような惨劇だった。

治療所のできたという御幸橋の上までたどり着き、死を覚悟した時「坪井ここに死す」と書き残した。ほかには何も書けなかった。そこへ軍のトラックがやってきた。そのトラックへは若い男が載せられた。治療して兵士として反撃するためだという。幼稚園くらいの小さな女の子が助けてを求めて乗り込もうとしたとき、兵隊はものすごい剣幕で怒り、その子をトラックから引きずりおろした。その子がどうなったかはその後、全く分からない・・・坪井氏はその時から約40日間意識不明であったという。

人間の命は、人権は、そんなものは関係ない。人間も武器や弾薬と同じ物として扱われる・・・それが戦争だと坪井氏は言います。

坪井氏は87歳になる現在まで、10度の入院（うち3回は面会謝絶）。慢性再生不良性貧血、悪性腫瘍、慢性虚血性心疾患等、大病を患いながらも広島県の中学校長を退任し、原爆の恐ろしさや戦争の愚かさ、平和の尊さを訴え続けています。

広島市長は式典の演説の中で「核と人は共存できない」と訴えました。福島では震災から2回目の夏を迎えても、いまだに故郷に帰れない人がいます。岩国基地ではオスプレイが陸揚げされました。戦争と核・・・新たな問題が山積している現在、未来を生きる子どもたちのために、私たち大人が、教職員ができることは何でしょうか。

3市1町 教育委員会への要望の会

本日、南房総市・鴨川市教育委員会への要望の会を終え、鋸南町・館山市を含めた3市1町すべての教育委員会への要望の会を持つことができました。各分会の先生方からの声を直接伝えることができ、大変、有意義な会になりました。また、組合も教育委員会も、子どもたちの健やかな成長を願い、同じ方向性を持って取り組んでいるということを確認することができ、充実した会となったことをご報告いたします。

その中で感じたことは、どの市町も財政がとても厳しく、限られた財源の中から優先順位や軽重をつけ、教育のために尽力してくださっているということです。教育委員会も予算を決定することはできません。それぞれの財政担当に話をし、議会を通して決定していただいています。その際に、各分会から「これは子どもたちのために絶対必要だ」「こんな教育効果がある！」という声を委員会へ伝えていくことが重要です。今後、次年度の教育予算を決定するためのヒアリングがあると思いますので、各分会でよく話し合っ市教委へ伝えていってください。

8. 8 鋸南町



8. 9 館山市



8. 10 南房総市



8. 10 鴨川市



参加して下さった先生方、ご苦勞様でした。この場を借りて御礼申し上げます。なお、不明な点などありましたら、遠慮なく書記局までご連絡ください。